武蔵野日曜聖書講筵

終末的な実存と希望
――テサロニケ前書第４章――

１９９２年10月25日
小池辰雄

キリストの中で在らしめられて在る　獅子・狼・豹　神の相に即して造られている　昇華現象
二重構造　我執が神執に変ずる　反射現象　天命に生きる　終末的希望　聖霊の力による働き
霊化して天界に行く　天的必然

【テサロニケ前４】

1 されば兄弟よ、終に我らの主イエスによりて汝らに求め、かつ勧む。なんじら如何に歩みて神を悦ばすべきかを我等より学びし如く、また歩みおる如くに増々進まんことを。2 我らが主イエスに頼りて如何なる命令を与えしかは、汝らの知る所なり。3 それ神の御旨（みむね）は、なんじらの潔からんことにして、即ち淫行をつつしみ、4 各々おのが妻を得て、潔く、かつ貴くし、5 神を知らぬ異邦人のごとく情慾を放縦（ほしいまま）にすまじきを知り、6 斯る事によりて兄弟を欺き、また掠（かす）めざらんことなり。凡て此等のことを行う者に主の報（むくい）し給うは、わが既に汝らに告げ、かつ証（あかし）せしごとし。7 神の我らを招き給いしは、汚穢（けがれ）を行わしめん為にあらず、潔からしめん為なり。8 この故に之を拒む者は人を拒むにあらず、汝らに聖霊を与えたもう神を拒むなり。

9 兄弟の愛につきては汝らに書きおくるに及ばず。汝らは互いに相愛する事を親しく神に教えられ、10 また既にマケドニヤ全国に在るすべての兄弟を愛するに因りてなり。然れど兄弟よ、なんじらに勧む。ますます之を行い、11 我らが前に命ぜしごとく力めて安静（しずか）にし、己の業をなし、手づから働け。12 これ外の人に対して正しく行い、また自ら乏しきことなからん為なり。

13 兄弟よ、既に眠れる者のことに就きては、汝らの知らざるを好まず、希望（のぞみ）なき他の人のごとく歎（なげ）かざらん為なり。14 我らの信ずる如く、イエスもし死にて甦えり給いしならば、神はイエスによりて眠（ねむり）に就きたる者を、イエスと共に連れきたり給うべきなり。15 われら主の言をもて汝らに言わん、我等のうち主の来りたもう時に至るまで生きて存（のこ）れる者は、既に眠れる者に決して先だたじ。16 それ主は、号令と御使の長（おさ）の声と神のラッパと共に、みずから天より降（くだ）り給わん。その時キリストにある死人まず甦えり、17 後に生きて存（のこ）

れる我らは彼らと共に雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎え、斯(かく)ていつまでも主と偕に居るべし。18然れば此等の言をもて互に相慰めよ。

●キリストの中で在らしめられて在る

この題「終末的な実存と希望」の「終末的な」は「実存」と「希望」の両方にかかります。そういう意味で書きました。

1されば兄弟よ、終に我らの主イエスによりて汝らに求め、かつ勧む。なんじら如何に歩みて神を悦ばすべきかを我等より学びし如く、また歩みおる如くに増々進まんことを。

「イエスによりて」は、「イエスに在りて」です。

2我らが主イエスに頼りて如何なる命令を与えしかは、汝らの知る所なり。

こちらの「イエスに頼りて」は「ディア」「よりて」です。

3それ神の御旨(みむね)は、なんじらの潔(きよ)からんことにして、即ち淫行をつつしみ、4各々おのが妻を得て、潔く、かつ貴くし、5神を知らぬ異邦人のごとく情慾を放縦(ほしいまま)にすまじきを知り、6斯る事によりて兄弟を欺き、また掠(かす)めざらんことなり。凡て此等のことを行う者に主の報(むくい)し給うは、わが既に汝らに告げ、かつ証(あかし)せしごとし。7神の我らを招き給いしは、汚穢(けがれ)を行わしめん為にあらず、潔からしめん為なり。8この故に之を拒む者は人を拒むにあらず、汝らに聖霊を与えたもう神を拒むなり。

パウロは相対的現実の事を、しかも、もう一つ高い次元から考えてものを言っている。

「エン」「に在って」という言葉は非常に大事です。「キリストの中で」と訳してもいいくらいです。「に在りて」という訳し方をしても、「に在りて」が何だかはっきりしないような気持の人が大分あるようです。

「キリストに在りて」というのは、

「キリストの中で、キリストと連なっていて」

という意味です。パウロはもちろん、いつもこの「キリストに在りて」です。福音の世界は「キリストに在りて」がもとでなければ、「によりて」ということが言えないわけです。「エン」（にありて）がなければ「ディア」（によりて）は言えない。我々の実存は

「キリストに在る」

ということが根底的な現実でなければいかんわけです。相対的な人間というものは、二重構造になっていますが、ゆらゆら動くけれども、しかし、「に在る」という魂の一番どん底の現実はある。「に在る」ということは、頑張ったって、なかなか「に在る」はできない、これは受け身にならないと。

「在らしめられる」

です。在らしめられて在る。

「キリストに在る」ということは、我々の側のいわゆる信仰によって「に在る」なんて言ったって、あてにならない。上からの力で在らしめられる。どこまでも、主体は神・キリストの側にある。我々はそれによることろの属体といってもいい。属する方です。客体と言ってもいい。

モーゼが出エジプト記で神さまに言われた言葉を、

「我は在りて在る者なり」

と、みんなそう訳している。けれども、私は文法をちょっと超越して、

「我は在りて在らしむる者なり」

と訳す。あれは本当はそういう意味だ。神さまが在るということが人を在らしめている。太陽が在ることが地球を在らしめている。太陽がただ在ったってしょうがない。我々は太陽に在らしめられている。地球は太陽に在らしめられているから、こうやって存在しているので、絶対的に太陽に依存している。だから、

「我々が信仰するかしないか」

そんなことは大したことでない。問題は、

「実はみんな在らしめられている」

ということ。それに気が付かなければ。みんな気が付いていない。気が付くことが信仰になるんです。だから、これは「信受」です。ただ仰ぐのではなくて、信じ受けとること。もっとはっきり言うと、「体受」、身体で受けとっている、存在的に受けとっていること。信受せざるを得ない、ざるを得ない世界なんです。

「まぁ、分からないけれども信じておこう」

なんて、ひとつも信仰ではない。

「信仰のみ、信仰のみ」

と言って、信仰がこちら側のサムシングであるような、

「信仰がなければダメだ」

なんて言って、信仰を私している。ダメだよ、そんなのは本当は。

「自分の信仰なんか棄てろ。そんなものではない。在らしめられていることに気が付くことが本当の信仰だ」

ということ。

地球は在らしめられている。我々は地球と一緒に太陽に在らしめられている。自然的存在の人間というものは太陽が絶対なんです。霊的存在の人間は神・キリストが絶対なんです。仏教で言えば、「如来」だか何だか知らんけれども。我々が本来、自分で持っているものは一つもありはしない。みんな与えられたもの、在らしめられているものです。お父さん、お母さんから出てきたもので、在らしめられている。そういうことに本当に気が付くと楽

になる。楽になって力がくる。頑張る必要がない。力が来てしょうがない。太陽の光がきてしょうがないように、キリストの光が来てしょうがない。

だから、

[1]されば兄弟よ、終に我らの主イエスによりて汝らに求め、

と。これは、パウロが言わなくたって、パウロはしょっちゅう、「に在って」ものを言っている。に在って存在し、に在って行動する。ただ「信仰のみ」なんて言っていたらダメなんだ。

賀川先生の流れのは本当の福音の世界だ。もちろん、彼らは特別な選びの器です。こんな真似はとてもできない。真似はできないけれども、その精神は、気持はやはり我々は本当に汲んでいなければ。

「キリスト召団はその点で、もう一遍生き返らないといかん」

と私は思っている。いい加減なクリスチャンなら、クリスチャンにならない方がいいくらいだ。いわゆる、大勢でワッショイワッショイなんて、そんなことでもない。本当に地道な歩き方です。

●獅子・狼・豹

[2]我らが主イエスに頼りて如何なる命令を与えしかは、汝らの知る所なり。

教会でいろんな問題があるわけで、この場合は特に性的な問題があると。

[3]それ神の御旨(みむね)は、なんじらの潔からんことにして、即ち淫行をつつしみ、

[4]各々おのが妻を得て、潔く、かつ貴くし、

この「妻」という字は本当は「器」という字なんです。パウロが「土の器」と言ったでしょ。あれと同じ字で、「スケウーオス」という字です。それを「妻」と訳している。

「己が器を得て、潔く、かつ貴くし」

ということ。夫妻関係で性的な正当なことは結構だけれども、

[5]神を知らぬ異邦人のごとく情慾を放縦(ほしいまま)にすまじきを知り、

だから、ちゃんと、そういった生活をしろ、と。

[6]斯る事によりて兄弟を欺き、また掠(かす)めざらんことなり。凡て此等のことを行う者に主の報(むく)い給うは、わが既に汝らに告げ、かつ証(あかし)せしごとし。

今度は、こっちの方は――

「兄弟を欺いてその妻を得る」

という意味にとる人もあるけれども、これはそうではなくて――慾の方です。性欲でなくて、今度は、貪欲の方だ。

エレミヤ記5章6節。ここはダンテが応用したところです。

「[4]故に我いいけるは此輩(これら)は惟(ただ)いやしき愚なる者なればエホバの途(みち)と其(その)神のさ

ばきを知らざるなり。5**われ貴人にゆきて之に語らん。かれらはエホバの途とその神のさばきを知るなり。然るに彼らも皆軛を折り縛を断り。**6**故に林よりいづる獅子は彼らを殺し、アラバの狼はかれらを滅ぼし、豹はその邑をねらう。此処よりいづる者は皆裂るべし。そは其罪おおく、その背違はなはだしければなり。」（エレミヤ５・４～６）**

ここに特に、「獅子」と「狼」と「豹」が出ている。「獅子」は傲慢の霊なんです。高慢、傲慢の霊はサタンです。これは一番悪い。「狼」は貪欲。「豹」は肉欲。それがやって来て、どうにもならん、と。これをダンテが『神曲』の第一曲で、ちゃんと応用している。ダンテは太陽が照っている山に登ろうと思ったら、その登り道に三つの動物が現れて、自分はこれに勝つことができなくて退いた、と。

「人生の旅路半ばに正しき道を失って……」

と。第一曲の31行から、

「すると、見よ、崖の始まろうとする所に、斑な皮に覆われた一匹の軽くしていと速き雌豹がいた。彼はわが顔の前に……、去らない。反って、わが道を遮ったので、幾度も身をかわして、私は帰ろうとした。時は朝の初めであり、太陽はまた諸々の星、即ち神の愛に……。進んで行くと、現れいでし一匹の獅子の姿にむかい、私を恐れざらしむるには足らなかった……。空気もこれを恐るとみえた。また、その痩相に一切の慾を担うと見えた一匹の雌狼が現れた」

だから、豹、獅子、狼と、この三匹が現れて、とうとう上に登って行くのを断念して、自分は坂を下ることにした。途方に暮れていると、或る影が現れたので、何とか助けてくれ、と。これがヴァージル（ウェルギリウス）です。人間は獅子にも狼にも豹にも勝てない。一時的には勝っても、決定的には勝てないんだ。

テサロニケ前書では、傲慢の方は今、問題にしてないで、この二つを、肉欲と貪欲を問題にしている。これに勝つためには、止むを得ないから、「器をもらいなさい」と。「器」とは奥さんのことだ。それで、ちゃんと正当な交わりをしていればいいんだと、そういうことをパウロが言っている。

●本当は神の相に即して造られている

7神の我らを招き給いしは、汚穢を行わしめん為にあらず、潔からしめん為なり。

それで、「潔くあれ」と一生懸命で書いてある。この「潔く」という字は聖霊の「聖」と同じ「ハギオス」という字です。この聖ということは神に属することです。神属なんだ。いわゆる潔くあろうとして、自分でもって、心を澄まして潔くあろうとしたって、これはできない。よく、一生懸命で

「聖潔、聖潔」

といって、魂が潔くあろうとしている。くたびれてしまうんだ、潔くあろうとすると。私なんかはもう落第だね。それでは、どうしたらいいのか。人間の衝動は、それが理性であろうと悟性であろうと感性であろうと――感性の中に肉欲的なものが入りますけれども――何でもこれは神さまからいただいているものなんです。それ自身はひとつも悪くない。情欲だってひとつも悪くない。全部、神さまがそういうように人間を造ったんだから、責任は神の方にあるんだ。そういういろんな衝動が自己本位になるからダメになってしまう。どんなに善さそうなものでも、自己本位になるからダメなんで、自己本位を「神・キリスト本位」に切り替えなければいかん。自己本位なものをどんなに潔くしようとしたってダメなんです。自分自身に勝とうとしたって勝てない。これはカントも言っている。

「自分自身と戦うことは一番難しい戦いである。自分自身に打ち勝つことは最も美しい勝利である」

と言っている。それはそうです。ところが、

「自分自身と戦うのは非常に難しい戦いである」

のは、これはいいんだけれども、

「自分自身に打ち勝つことは最も美しい勝利である」

の、「打ち勝つ」ことができないんだ、みんな。ダンテもこれができないものだから、地獄の方に落ちて行った。マルティン・ルターでもそうです。とにかく、宗教家はみんなそうです。自分との戦いで参って、絶望的な点にきて、それからひっくり返る。それで、親鸞のように「弥陀の本願」によったり、禅宗では悟ろうとして大いにやるんだけれども、本当はご苦労さんなんだ。

「本当のあるがままの自分の相は仏なんだということに悟らなくてはいかん。人間は本来は仏性を持っている。その仏性の世界に本当に目覚めろ」

というのが禅宗でしょう。

我々も本当は、神の相に即して造られている。神の相は無相の相です。神の相に即して造られた。創世記1章27節に書いてある。あれは「似姿」ではない。似姿という訳はよくない。「似ている」ではない。即しているんです。即、同質なんです。ところが、「パラダイス・ロスト」（楽園喪失）で、背いてしまったものだからどうにもならない。自由は、善にも悪にもどちらにも向かうことができるのが、この自由の世界だから、恐ろしいんだ。

「神さまに自由をもらった」

というのは、あり難くて、恐ろしい。これでみんな間違えてしまった。神に依存すること、人を愛することが本当の自由の世界だけれども、それが欲で自己本位になってしまって、お互いに争う。

人間は本当は無相の相に造られている。けれども、パラダイス・ロストなので、それをひっ

くり返して、

「私が全部それは引き受けたよ。お前の、現在・過去・未来の自我という、我執というやつは全部引き受けた。十字架でもって贖ってしまったから心配は要らん。相対的な人間小池は躓いたり転んだりしたって心配するな。私に来い」

というのがキリストの十字架ですから。

●昇華現象

7神の我らを招き給いしは、汚穢（けがれ）を行わしめん為にあらず、潔からしめん為なり。

「潔からしめん」と書いてあるから――「潔からしめる」は受け身だからいいですけれども――自分でもって潔からんとしたらダメなんです。

8この故に之を拒む者は人を拒むにあらず、汝らに聖霊を与えたもう神を拒むなり。

それでは一体どうしたらいいか。これは、自然現象の方で、「昇華」という言葉がある。昇華というのは、固体をいきなり気体にすることです。液体をぬかして、固体を気体にすることを昇華という。この昇華現象です。人間がいただいたいろんな衝動はそれ自身は悪くはない。それが自己本位になるから、何だかんだと大騒ぎになる。だから、いただいたものを、

「自分で棄てろ」

と言ったって、これは棄てようがない。いただいたいろんな衝動を昇華させるんです。ということは、神・キリストの方に向けて方向転換する。欲があるなら、その欲はキリストをつかまえるという欲に変えてしまう。

「なんじ心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし」（マルコ12・30）

という。愛も、いわゆる恋愛的な愛から、神・キリストの方へ方向転換をする。これはみな昇華ということです。方向転換すると、質的に変わってくる。

旧約の雅歌書は恋愛の素晴らしい歌です。歌の中の歌という。これを読んでいると、男女の愛のことが書いてある。これは「ソロモンの雅歌」でも何でもない。ただちょっと体裁的にそのようにつけた。

「1これはソロモンの雅歌なり。2ねがわしきは彼その口の接吻（くちづけ）をもて我にくちつけせんことなり。汝の愛は酒よりもまさりぬ。」（雅歌1・1～2）

と、凄いことが書いてある。正に男女の恋愛で、これが夫婦になれば結構だと。けれども、中世の神秘家たちは――ベルナールなんかそうです――この雅歌書を読んで、これを昇華して読んでしまう。即ち、この男女の愛を神との愛に切り替える。

「これは神さまとの愛を言っているんだ」
と。そうして読むと、人間的な表現で言っているけれども、霊的な次元の方へ切り替えてしまう。あの神秘家たちは、
「神さまとの愛がこれだけ密なるものであらなければいかん」
というように読んだんです。だから、雅歌書というのが非常に美しいものになってしまった。本来の雅歌書は恋愛の詩なんだけれども。ゲーテが好きだった。
昇華ということ。向きを変えろと。それを棄てるのではない、それを我慢して一生懸命でそれと勝とうとするのではない。
「すべて頂いたものは結構なものだから、その結構なものを本当に結構にするためには、神さまとの交わりにおいてそれを肯定していけ」
ということ。単なる否定ではない。肯定していく。大肯定していく。これが昇華現象です。そうすると、肉的なものが霊的なものに変わってしまうわけです。それだから、「潔く」なんて言っている必要はもうない。変わったところの、その事態が潔き事態になってしまう。だから、非常に明るい肯定になる。人間は神さまにいただいたものを全部、大肯定して、神・キリストとの交わりにおいて進んでいけば、すべてそれが素晴らしいことになってしまう。だから、いわゆる禁欲ではない。欲を禁欲ではなく、変欲するわけです。欲を変えてしまう。欲の変貌だ。そうすると、我々が賜っている理性も感性も悟性も全部これが神において本当の霊性の中にみな入ってしまう。それが霊的なんです。霊的とはそういうことです。御霊に在るところの現実というのを霊的現実という。

●二重構造

神とのそのような現実は、神さまの世界が来た時に本当の現実になるけれども――ところが、今は我々は二重構造だけれども――そういう現実を終末的な現実という。そういう在り方が終末的実存です。神の国を現在において――「神の国」というのはこの「終末」ですから、「歴史の終り」ということ、歴史の終りというのは「神の国がくる」ことです――歴史の終りで神の国が来たその所の実存を、この切替えでもって、昇華現象において私たちはいただく。二重構造だけれども、これは本当の信交の現実です。神・キリストとの霊的な交わりの世界です。
だから、今は本当のことを言おうとすると、こういう新しい表現を使わなければ言えないんです、いわゆる信仰では、仰いでいたのでは。信仰という言葉が一つの熟した言葉になってしまって、それがいわゆる
「私たちの信仰、信仰」
と言って、しょっちゅうこちら側のことになっている。
「こちら側ではないぞ」

と言うんだ。そうすると、明るくなるし、力がくるし、楽だし、有難い。そういうわけですよ。どうですか、皆さん、そう感じませんか。

今、私は「感ずる」と言ったね。これが大事なんです。これはからだで感じてくださいよ、あたまではない。これは「体感」という。本当の体感は霊感と同じです。あたまでわかる、わからないではない。「感じました」ということ。感じ入る、感入と言ったっていい。或ることに感激すると言うでしょ。あれも感激なんだ、理激ではない。悟激でもない。感ずるということが非常に大事なんです。これはハートの世界ですから。ハートと魂が感じている。感動している。根元的なんだ。だから、二重構造であっても、そんなことは心配は要らん。そういう現実を根元現実というんです。そういう終末的根元的な現実の在り方が本当の実存という。いわゆる実存哲学の実存ではない。

●我執が神執に変ずる

それで、パウロさんよりも、私はもうひとつ突き抜けた言い方をしているわけです。

「潔く、潔く」

なんてパウロは言っているけれども、

「さぁ、大変だ、潔くなれるか」

なんて、普通のクリスチャンはみなそれで一生懸命でやっている。ヘタすると偽善になる。

そういう昇華現象を起こす。だから、今度は、本を何を読んでも、その角度で見ると、その本の内容を昇華現象で福音的に切り替えることができる。そしたら、汚れとか潔さとか、そんなことはもう考える必要はなくなってしまう。「汚れ」とは本当はおかしな言葉なんだ。我執なんです、みんな。我執が今度は、神に執く、神執になれば、神に即すれば、そうすると、これは汚れもヘッタレもない。そういうふうに、突き抜けてしまったら、あり難くて楽でしょうがない。

賀川さんという人はそういう角度で動いていた。全部、自己本位でない。ペスタロッチがそうだ。

「他人たちの為にのみ」（ヌール　フュァ　アンデレ）

と。それもひとつの自己意識で言っていたのではダメなんだ、自然にならないと。第二の自然性にならないと。

天性という言葉があるね、

「天性はこうである」

とかいう。本当の天性ではないんだ、「天性、天性」なんて言ったって。性来賜りたる性です。けれども、幼子を見ていると、どこの幼子もみんな可愛い。国境がない。幼子には国境の意識なんかありはしない。幼子たちはどこ人であろうと、すぐお友達になる。

「あれはロシア人だからいやだ」

なんて言いやしない。みんなお互いに友達になる。幼子の世界はもう天国の世界だ。だから、キリストが言ったとおり、

「幼子の如くならずば天国に入れない」

という。幼子の気持は天真爛漫という。

小川はそうなんだけれども、段々、川が流れて都会にくると、濁流になってしまう。大人がみなこの濁流的存在なんだ。濁流を今度は清流にするにはどうしたらいいか。これは昇華現象になればいい。液体が気体になればいい。液体が気体になって上に上がっていくと、濁流が上に上がると、今度はきれいな水になる。雨水はちっとも濁ってない。これが昇華現象です。海の水が塩分でもって浄化されて、それがまた上に上がっていくときれいな水になる。嵐になったり何かするけれども。

昇華現象というのは、非常に面白い言葉です。いわゆる禁欲でも修行でも何でもない。

「向きを変えろ」

ということです。ということは、この昇華現象は上からの力でもって、光でもって、昇華現象が自然に起きるわけです。上からの光がくるから、液体が気体になってしまう。この昇華現象だって、もちろん神・キリストの熱や光が来ているからです。神・キリストに気が付くというと、光が来るから、昇華現象を自然に起こす。神・キリストの熱や光の、その内容は何かというと、愛なんです。天からきている愛です。愛の力が私たちに昇華現象を起こす。

●反射現象

だから、

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、主なる汝の神を愛すべし」

と、キリストは随分難しいことを仰ったけれども、あれは「愛すべし」ではない。

「私はお前たちをこんなに愛しているから、お前たちは愛せざるを得ないねぇ。そうだろ?」

と。だから、

「本当の信仰はレアクツィオーン（反射）だ」

と、ダイスマンが言った。反射現象です。光がきて、それが上へ反射する。

「本当の信交は反射現象だ」

と。みんなこれは上から光と愛が来る。私はパウロさんを読んだって、パウロにひとつも負けやしませんよ。聖霊がそうやって読ませてくれるから…（異言）…。

いいですか。何事も全部、受け身でもって展開していくのですから、この受け身を忘れてはダメですよ、自分で何かしようと思ったって。それで、今度は本当の力がくるから凄い事ができる。皆さんがなさることは何でも、女の方でも、男の人でも、自分のすること

に本当の力がくるのは、この原動力による。それが「に在る」世界なんです。

「エン・クリスト」

の世界です。エン・クリストは観念ではない。本当に力を持っている。

「キリストの中にある」

から、そこから、こっちはキリストからの放射能みたいに出ていくんだ、いろんなことに。ただキリストの中にいておしまい、ではダメだよ。そんなことをしたら濁ってしまう。水は流れるからいいのだから、泉のように。

「汝の中から泉の如くに湧き出るぞ」

とキリストが仰ったのはそのことなんだ。

「私をうけとれ。そうすれば泉の如くに湧き出るぞ」

と。池ではダメだ。

パウロはこんな、まとまった事を言っているけれども、そうすると今度は、

「パウロが『潔からしめんために』と言っている。一体潔くなれるだろうか？」

なんて、みんなそれでもって苦しくなってしまう。聖書を読んでいて苦しかったら、本当はダメなんです。これは苦しい世界ではない、喜びの世界なんだから、福音というのは。喜びの音信なんだ。みんな、ちっとも喜んでいない、

「何だか知らないけれども、難しいなぁ」

なんて。ひとつも難しくない。

「聖書を読んで楽しくてお腹がすかない、おなかがすいていても大丈夫だ」

なんてな事になる。コスモスの花が咲いているようなものだ。「コスモス」というのは凄いね、これは「宇宙」という名前だから。

●天命に生きる

9 兄弟の愛につきては汝らに書きおくるに及ばず。汝らは互いに相愛する
事を親しく神に教えられ、10 また既にマケドニヤ全国に在るすべての兄弟を
愛するに因りてなり。然れど兄弟よ、なんじらに勧む。ますます之を行い、
11 我らが前に命ぜしごとく力めて安静にし、己の業をなし、手づから働け。
12 これ外の人に対して正しく行い、また自ら乏しきことなからん為なり。

パウロは幕屋造りをやっていた。我々は、男でも女でも、何かしてなければダメなんです。金を儲けるとか儲けないとか、そんなことではない。とにかく、

「何かしてなさい」

と。パウロは、この場合、もちろん生活的な自立のことを言っているのだけれども。信仰の世界は、やはり経済的にただ依存していたらダメなんだ。

「神さまに本当に依存してやっていれば必要なものは必ずいただける」

ということは本当だものな。株なんかやってガタッと儲けようなんて、そんなのはダメだ。地道に働くことです。それから、宝くじなんかで当てたりなんかする、そんなのはダメだ。くじなんか引くものではない。そういう投機的なことはダメです。地道に働くと、必要なものは与えられる。

ヒルティがよく言っている通りです。働くこと自身が本当の楽しみで、それ自身が結果なんです。原因と結果が同じだ。

「楽園喪失で仕方なしに働いた」

なんて、聖書には書いてあるけれども、仕方なしに働くのではない。祝福されたる労働です。そのことも賀川先生が大いにやったわけです。

とにかく、何でもやる。だから、寝たっきり老人なんてのはよくないんだ、本当は。働いていて、もう動けなくなったら、それで天命だから、スーッと天界に行ったらいい。それを医学的に延命をやって、ご当人も気の毒だし、とにかく、おかしいよな、日本は、動けない人たちが生命をただ延ばしてもらったりしていて。「天命」というのは大事なんだ。その一人ひとりに寿命というものがある。天から授かった寿命を延ばしたら、本当はうまくないんだ。

「私は天命に生きますから、どうぞ余計なことはしないでください」

と私ははっきり言うつもりだから。大体、ぶっ倒れるまで何かするつもりだけれどもね。一番いいのは、伝道してぶっ倒れるのが一番いい。あたりにご迷惑かも知れないけれども。

●終末的希望

パウロたちは、使徒たちは――キリストもそうですけれども――神の国はやがてくると思っていた。

「私が来る時にはまだ生き残っている人もある」

なんていう言葉があるんだからね、キリストでもパウロでも。

それで、今度は「終末的希望」の事が書いてある。

13 **兄弟よ、既に眠れる者のことに就きては、汝らの知らざるを好まず、希望（のぞみ）なき他の人のごとく歎（なげ）かざらん為なり。** 14 **我らの信ずる如く、イエスもし死にて甦えり給いしならば、神はイエスによりて眠（ねむり）に就きたる者を、イエスと共に連れきたり給うべきなり。** 15 **われら主の言をもて汝らに言わん、我等のうち主の来りたもう時に至るまで生きて存（のこ）れる者は、既に眠れる者に決して先だたじ。**

先に逝った者が甦って、それから、甦るのも後から甦らされるということが15節に書いてある。それくらいに神の最後の時はさし迫っているという、そういう現実でものを言っているわけです。

16**それ主は、号令と御使の長の声と神のラッパと共に、みずから天より降り給わん。その時キリストにある死人まず甦えり、**

「ラッパ」という言葉で、思い出すのは、内村先生の句なんです。

「天地も揺らぐラッパの一声に甦るらん春の曙」

この「春」は永遠の春だ。これは内村先生のなかなかいい句だ。それがこの最後の新天新地の希望です。

●聖霊の力による働き

それでさっきパウロが、

「しっかり働け。実存が大事だ」

と言った。これは終末的な実存です。

終末的な実存で、一つの譬話を思い浮かべるわけですが、それはキリストが言われた、あのマタイ伝25章の「十人の乙女」の話です。五人は本当に準備していなかった。

1「このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。2その中の五人は愚かにして五人は慧し。

「愚か」というのは、馬鹿ということではない。神さまに本当に仕えることをしないのが「愚か」です。

3愚かなる者は燈火をとりて油を携えず、4慧きものは油を器に入れて燈火とともに携えたり。

新郎が遅かったので、皆まどろんで寝ていた。夜中になって、

5新郎、遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。6夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼ばわる声す。7ここに処女みな起きてその燈火を整えたるに、8愚かなる者は慧きものに言う「汝らの油を分け与えよ、我らの燈火消ゆるなり」……11その後かの他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いしに、12答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。」（マタイ25・1…12）

それではダメだ、という譬話です。即ち「油を器に入れて」というのは、実際の準備をしているということです。「油」というのは、私に言わせると、聖霊の内容です。聖霊の内容は、聖霊によって自分が本当に働いている。それを持っているということは、働いて持っているわけです。ちゃんと生活をもって、いつ神さまが来ても、キリストがやって来ても、再臨しても、

「はいっ、準備ができています」

というのが、この実存なんです。本当の聖霊の力による働きをやっているか。エン・クリストにおいて働いているか、動いているか。これがその

「油を持っているか」
ということです。それをやってないというと、本当の準備でないからあわててしまう。
「今日でも明日でも、さぁ、キリストさま、いらっしゃい」
ということは、我々が本当の生き方をしている一人ひとりなんです。内容はみんなそれぞれです。けれども、本当の生き方をしているかということ。それが
「油を携えている」
ということになるわけです。
私はよく「聖霊、聖霊」と言うけれども、御霊は無限の内容を持っている。ただ「御霊」と言っているのではない。この聖霊の力でもってその人はいろんなことをやる。そういう働きを持たない聖霊だったらダメですよ、「聖霊、聖霊」なんて言ったって。御霊は力を持っているから、やらざるを得ない、動かざるを得ない。
私は自転車に乗っていたって、そうですよ。御霊の力で動いている。疲れない。妙だね、私は本当に。88才で自転車をグルグル回しているなんてのは余りいないようだけれども。自転車が身についている。
祈るというのはお願いではない。祈るということは祈入なんです。キリストの中に入らなければダメです。黙って何も文句は言わなくて、黙って
「主さま！」
と、もうそれでもってキリストの中に入ってしまうから。それだから、力がくる。私みたいな簡単な人間はいないのかも知れないな、よく知らないけれども。だんだん簡単になってしまった。

●霊化して天界に行く

17後に生きて存(のこ)れる我らは彼らと共に雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎え、斯(かく)ていつまでも主と偕(とも)に居るべし。18然れば此等の言をもて互に相慰めよ。

雲に取り去られて、主に迎えられる。だから、もし、キリストがいらっしゃると、我々の肉体が霊化して天界に行ってしまう、エリヤみたいに。霊化して天界に行くためには、実存が大事なんです。普段の在り方なんです。
「キリストを中心に動いているか」
と、この事だけです。ということは、いいですか、観念的に考えてはダメですよ。
「御霊がきてなけば私には力がありません」
というところまで来ないと。
「私の力も智慧も全部これは聖霊によっている」
と。そんなことを二段構えに考えないで、それがもう、有難い超自覚の世界です。超自覚

の世界になると――まぁ、私は88才になってやっとそんなことを言っているんだからね――あなた方はもっと若いから凄いことになる。

いいですか。本当のクリスチャンというのは少ないんです、やっぱり。だから、キルケゴールが言っているとおり、

「天才よりも本当のクリスチャンは少ない」

と。さすがにキルケゴールだね。皆さんはその極めて少ない人たちです。

「何年教会に通ったから」

ではない。教会に行く行かないはどうでもいい。本当にその世界に入っているか。ヒルティなんてのは教会に行かない。それでちゃんと自分でその世界に入っている。

●天的必然

日本は問題だらけだ。一番問題なのは、教育界。その次は政治界。教育が本当の教育でないから、みんなすべてが狂ってくる。幼稚園から小学校の先生が一番大事なんです。もう中学では遅い。ドイツでは小学校の先生には優秀な人が成るんですよ。ビスマルクが

「小学校の先生に私は感謝する」

と言った。そういう事でなければダメなんだ。その根元の世界は、何と言ったって、高次な宗教、福音の世界です。

だから、あなた方は本ものを掴んだのだから、知らない間に伝道になっていく。一対一の伝道をしなければダメですよ。意識してするのではないけれども。全部、ざるを得ない、

「かくせざるを得ない」

「ノー　アザー　キャン　アイ　ドゥー」（英）

「イッヒ　カン　ニッヒツ　アンデレス」（独）

という世界です。「かくせざるを得ない」という世界が一番本当の世界です。これはヒルティが言っている。これは天的必然という。本当の自由は天的必然ですから。「ざるを得ない」というのがこの天的ということ。物理の世界では物理的法則も、これは必然だね。霊界で、宗教界の本当の世界は、この天的必然の世界です。

「こうしようか、ああしようか」

と一生懸命で選択しているのは道徳の世界。道徳の世界にいる限り、迷って力がなくて、本当はどうにもならんです。行き詰まってしまう。道徳が悪いのではないけれども。

霊的な必然と、物理的な必然。まんなかは道徳の世界。

「すべし、すべからず」

では、くたびれてしまう。旧約聖書はこっちなんだ。それ自身は結構なことなんです、もちろん道徳それ自身は。それをやろうとすると、できない。

どうですか、楽しくなったですか。私の話を聞いていて楽しくならなければダメですよ、

「何か難しいなぁ」
なんて。ちっとも難しくない。
「終末」というのは、「エスカトロギー」という字で、ギリシア語で「エスカトス」という。
エスカトスとは
「終り、終末」
という字です。歴史の終り。そこから本当の「神の国」が始まる。
「歴史を乗り越えた世界」
を「終末」という。終わっておしまいではない。終末という言葉はおかしな言葉ですけれどもね。賀川さんが、
「宇宙は目的論的なものだ」
と言ったが、その目的論的な意味もこの終末の中にある。神さまは完成をねらっているのだから。
そして、その希望の世界を現実に持っていなければダメなんです。「終末的な希望」を現在的な終末として持っていなければ。それがこの「終末的実存」ということです。

「天国は汝らのうちにあり」

というのがそれなんです。終末的実存を生きている時には、「天国は汝らのうちにあり」がそうなんです。
「天国はやがて来るけれども、本当はお前たちの中にあるぞ」
と。だから、私たちがこの世を去る時に、「終末的な大希望」を持って去っていかなくては。終末的実存を生きていればそれができるわけです。だから、
「信仰のみ、信仰のみ」
なんて言っている観念信仰はおよそダメなことがいよいよ分かる。

17 **後に生きて存（のこ）れる我らは彼らと共に雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎え、斯ていつまでも主と偕に居るべし。**

哲学ではない。霊的な現在の世界です。
それでは、今日はこの辺で。